

---

シンポジウム

---

## 論題 中世哲学における〈ことば〉

司会 聖心女子大学 宮内久光

提題：トマス・アクィナスにおける言葉

上智大学 K・リーゼンフーバー

提題：R・ベイコンにおけるレトリカと

ポエティカ

同志社大学 日下昭夫

(於中央大学 1990. 11. 18)

司会

宮内久光

〈ことば〉を主題とするシンポジウムは本年度で三回目を迎えたが、今回はK・リーゼンフーバー氏が「トマス・アクィナスにおける〈ことば〉」、日下昭夫氏が「R・ベイコンにおけるレトリカとポエティカ」という提題で発表された。

リーゼンフーバー氏は、創造論や三位一体論をも視野の中に収めた包括的な観点からトマスにおける言葉の問題の考察を進める。主要な論点は、言葉の果たす機能が思念されたものを媒介するという点であり、言語の構造は実在の構造から厳密に区別され、外的言語が意味作用を遂行しうる根拠はそれ自らにではなく、知性が実在を認識する働きにあり、したがって言語の構造は認識の構造に基くが、外的言語が必要とされるのは思考のためではなく、思考を表現するためである、ということである。言語の本質はこのように認識の表現として把握されるが、あらゆる精神的認識の成果は「表現」という性格を持つゆえに、人間の認識の完成は内的言語の表出にあるとされる。トマスは、内的言語を精神的認識全般の内在的完成として把握することによって、知性的認識一般の内的な言語性への洞察の道を拓いた、とされる。以上のような言葉の把握は十四世紀以降の言語観との批判的対決において一層実り豊かに結実すると予測されよう。

他方、日下氏は R・ベーコンの学問の分類の中で特異な位置を占めるレトリカに注目することによって言葉の問題を考察する。

実践的知性を動かす弁論的議論は実践的・道徳的領域において、思弁的知性を動かす弁証論的議論を無限に凌ぐものであり、就中人間行為全般を救いに結びつける諸真理へ向ける説得の議論は弁論的でありながら「詩学的」と呼ばれるべきものであり、この詩学的議論こそ道徳的・宗教的言説たるべきものである。したがって、ベーコンにとって、弁論的議論は論理学の一部でありながら、神学に次ぐ最高の学である道徳哲学に属するのであり、それはアウグスチヌスに依拠するものである、と結論される。

同じ十三世紀に生きながらほとんど接触を持たなかったトマスとベーコンを共通の地盤で論議することは、困難ではあっても不可能ではないと思われる。議論の接点が充分に見出せなかったことは専ら司会者の責任であるが、共通の問題点の提示などの方法で充実した討論の展開を計ることも今後の課題の一つではないかと思われる。

## 提 題

## トマス・アクィナスにおける言葉

K・リーゼンフーバー

### 1. 外的な言葉

言葉とは何か、という問いの出発点は、外的な言葉 (*verbum exterius*) である。「我々の場合、より明白に、またより一般的に言葉と呼ばれるのは、声に出して発せられる言葉である」(*S. th. I, 34, 1 c*)。しかし、外的に発声されるこの構造化された音声は、「魂の中にある様態を表すしるし」(*In Joh. 1, 1, I, 25*) にほかならない。つまり、外的な言葉は「知性が持つ概念を表示する」(*S. th. I, 34, 1 c*) が、このとき表象力は音声を分節化された形状に構成し、概念の内に思念される意味はこの音声の中に受肉するのである。「音声は、表象から発する」(*ibid.*)。表象力は自らの働きによって可感的形相を形成するが、この点で表象力の形成する「形相は、知性の(形成する)言葉に何らか似たものである」(*Quodlib. 5, 5, 2, 2*)。表象力が持つ構成機